

●モノグラフ小学生ナウ



地域

vol.3-12

©1984(株)福武書店 教育研究所/加藤智博
放送大学教授 深谷昌志
お茶の水女子大学大学院 斎藤智子



目次

特集／地域と学校との関係をどうとらえるのか…………… 2

調査レポート／地域

要約と提言…………… 7

1. 地域の遊び…………… 8

- 変わってきた遊びの姿…………… 8
- 地域別の実態…………… 11
- 子どもが地域に望むもの…………… 16

2. ギャング・エイジのゆくえ…………… 20

- ギャング集団の存在…………… 20
- ギャングたちの日常…………… 24

3. 地域の人間関係…………… 27

- せばまる人間環境…………… 27

まとめに代えて…………… 33

シリーズ／子ども考現学

子どもの姿・昔と今(22) 卒業式…………… 37

資料1 調査票見本…………… 42

資料2 学年・性別集計表…………… 53

12月)
1月)
2月)
3月)
4月)
5月)
6月)
7月)
8月)
9月)
10月)
11月)
12月)
1月)
2月)
3月)
4月)

地域と学校との関係をどうとらえるのか

放送大学教授 深谷 昌志



学校の地域化

このところ、教育関係者の間で、地域に着目する動きが強まっている。たしかに、地域の中で遊びたわむれる子どもたちの声が消えてから10数年を経て、子どもの人間形成に歪みが生じてきている。そして、そうした歪みの発生を学校として放置できないから、なんらかの手を打ちたい。

そうした意味で、やむを得ずか、それとも、積極的にはかともあれ、学校が地域に目を向け始めた状況は理解できる。しかし、そのかわり方が問題であろう。

第二次大戦後の教育界で、オルセンの『地域社会学校』やクックの『教育とコミュニティ』などが訳出され、地域社会学校ブームがおきたことがあった。

学校は地域の中に孤立して存在するのではなく、学校と地域との間にさまざまな橋をかける。その橋を渡って、地域の人たちも学校へ入ってくるし、そして、学校も地域へ出ていく。そうした形で、地域と学校との関連を深め、地域を基盤とした学校作りをめざそうという理論である。

たしかに、アメリカの学校などでは、親たちがボランティアとして、学校のさまざまな面に活躍しているのが目につく。スポーツを

指導する、採点を手伝う、音読の相手になるなど、教師の仕事の一部を手伝う親たちの姿も見られる。

学期の始めに、担任が学級ごとに必要とするボランティアの数を、「月曜の7時から約1時間、ピアノを弾ける人」、「水曜の午後1時から1時間半、バスケットボールの指導のできる人」などの形で、校長に申し出る。校長はPTAの協力を求めて、ボランティアをつのる。その中から、人柄やキャリアなどを考慮して人選を進め、①指導の大ワクは、学校の指示に従う、②評価には関与しないなどを条件に、ボランティアを決めるという。

ワシントン州の学校を訪ねた時には、市のオーケストラの指揮者がプラスバンドの指導に、そして、数学専攻の大学教授が低学年の算数指導にあっていた。もちろん、そうした専門家の他に、読みの遅れた子の聞き役となるお年寄り、家庭科のクッキー作りを手伝う母親など、ふつうの親たちも少なくない。

こうした形で親たちが学校へ入ってくると、当然のことながら、親のもつ文化も、学校の中に浸透してくる。もう一度、ワシントン州の学校へ話を戻すなら、数学の教授は、くり返し考えることの必要を説き、計算間違いにこだわらない態度を示していた。もちろん、学校の先生の立場からすると異論もあろうが、子どもたちにとっては、えらい数学の先生が知っているだけに説得力をもつ。また、オーケストラの指揮者は、良い音楽に耳を傾けるのが音楽作りの前提になるといって、レコード鑑賞に多くの時間を費やしていた。指揮者の解説つきであるから、子どもたちも、熱心に聴き入っていた。

親たちが学校へ入ってくるのと並行して、子どもたちも、教師の指導のもとに地域の工場を見学したり、野山へ自然観察へ出かけたり、近くのグラウンドでスポーツを楽しんだりする。

つまり、地域社会の、学校との関係は、

① 地域社会から学校へ

② 学校から地域社会へ

といった両方向からとらえるのが可能なのであろう。そして、①、②を通して、地域的な環境や資源を学校の教育目的のために活用すると同時に、より厳密には、地域の素材を教材化していく。そうした形で地域に根をおろした学校作りをめざすのが、地域社会学校の本質なのであろう。

そして、日本の場合でも、地域社会と学校との関係がかならずしも密接でないといっても、①の形としては、PTA、授業参観、ママさんバレー、あるいは家庭教育学級など、親たちが学校へ出入りする機会は少ないとはいいがたい。それと同時に②の形も、学校の努力によっては、地域に学習の素材を求め、それらを教材化するのは十分に可能であろう。というより、社会科や理科をきちんとした形で展開しようとするなら、地域に素材を求めざるを得まい。

したがって、①、あるいは②のいずれの方向にせよ、学校の地域化は、いわれる以上に進展しており、これから先も、学校の努力によって、さらに密接な関係を保つ可能性は強い。

ギャング集団が消えた

親にかぎらず、地域の人たちが学校へ出入りしてくる。そして、地域性を生かした学習プログラムが、学校の中で展開される。

そうした形で地域社会と学校との関係を密接なものにしていけば、冒頭でふれた子どもたちの人間形成面での歪みは解消するのであろうか。

考えてみると、地域をめぐる問題の多くは、子どもたちの姿が地域から消えたことから生じてきている。

ひと昔前まで、子どもは、まず、ままごと遊びのメンバーとして地域に登場してきた。

家のまわりに何人かの幼い子が集まり、ごっこ遊びをする集団である。

その後、小学生になると、もう少し規模の大きな遊び仲間のメンバーとなる。小学高学年生がリーダーとなり、低学年の子もミソッカスとして仲間に入る。この集団は、かくれんぼや鬼ごっこ、そして、メンコやビー玉、時にはチャンバラごっこなどの遊びをするグループだが、この仲間は

- ① 集団としてのまとまりをもつだけでなく、リーダーとフォロアーの関係も明確で、
- ② 他の集団との間になわ張りがあり、
- ③ 集団内だけで通じるスラングや暗号、時には、秘密の隠れ家を持ち、
- ④ メンバー同士が強い帰属意識をもつなどを特色としている。そして、そうした遊び仲間は、時として、徒党を組んで悪さをすることから、アメリカの社会学者、スラッシュャは、この集団を「ギャング」(Gang)、また、ファーフェイは、こうした年齢の子どもたちを「ギャング・エイジ」(Gang Age)と名づけている。

現在でも、小学生たちの遊びの群れをギャングとよぶのは、世界的な定説となっており、どこを訪ねても、遊びたわむれる子どもの姿に接することができる。

しかし、どうしたことか、日本ではギャング集団の姿はなく、子どもたちは、家の中にこもったまま、いわば孤立した形で、毎日を暮らしている。

それだけに、ギャング集団といわれたかつての群れ型の遊びが、人間形成にどのような意味をもっていたのが気がかりとなる。

群れ型の遊びを通して、子どもたちは

- ① 体が丈夫になる
- ② 社会性が育ってくる
- ③ 創造力が芽ばえる
- ④ がまんをする力がつく
- ⑤ 精神的に安定する
- ⑥ さまざまな体験を積める

⑦ やる気が育ってくる

などを学んでいったといわれる。

鬼ごっこをすれば、体を動かすから健康になるし(①)、友だちがいるので社会性も育つ(②)。もちろん、逃げ方などを工夫したり(③)、じっとがまんをしたり(④)している間に、ストレスが解消される(⑤)効能も期待できる。その他にも、野原で鬼ごっこをしているうちに、寒さや暑さなどの自然と接する機会もふえる(⑥)というあんばいである。

そうした意味で、ギャング集団は、子どもの人間形成を幅広く育てる母胎であったともいえよう。事実、昔から、学校の優等生は社会へ出てから失敗することが少なくない。しかし、がき大将は、程度の差こそあれ、社会的に活躍するといわれてきた。

こうしたギャング集団の効用は、①～⑦の他にも、いくつもあげることができよう。しかし、つきつめていえば、

- ① 何人かの友だちと
- ② おとなたちから監視されることなく
- ③ それぞれの子が自主的に参加して
- ④ 集団としての行動をとる

ことがギャング集団の、他では求められない特性なのであろう。そして、現代の子どもたちは、そうした人間形成の場を失っているのである。

地域を子どもたちの生活の場に

もともと、子どもの人間形成は

- | | | |
|----------|---|----------|
| 子どもの人間形成 | { | ① 家庭教育 |
| | | ② 学校教育 |
| | | ③ 地域での教育 |

のように、3つに分かれて営まれると考えられる。あらためてふれるまでもなく、学校は、子どもの人間形成をつかさどる主たる場のひとつではあっても、すべてではないのである。

特に、欧米では、それぞれの国により多少



の開きが認められるが、原則として、勉強は学校、しつけは家庭、遊びやスポーツは地域という役割の分化が定着している。

フランスの学校を例にとると、教科書は貸与制がとられ、子どもたちは教科書を学校に置いておくので、宿題を除けば、家庭で勉強することが少ない。加えて、定期的な授業参観はないし、親たちが校門の中に入るのも原則として許されていない。勉強は学校で責任をもってさせるから、必要があれば居残りもさせる。したがって特に連絡をしないかぎり、勉強は安心して学校にまかせてほしいという態度である。そのかわり、修業旅行や学芸会、運動会など、勉強に直接結びつかない活動は学校で行われず、そうした営みは、地域や家庭での教育に委ねられている。

フランスにかぎらず、欧米では地域に教会があって、人びとの信仰上のシンボルとして機能しているだけでなく、YMCAやYWCAに象徴されるような地域を単位とした教育活動が展開されてきている。その他、ボーイ（ガール）スカウトやさまざまなスポーツクラブなどがあって、地域に根をおろした教育を行っている。特に、夏休みに入ると、そうしたさまざまな団体が、子どもたちのためのキャンプ・プログラムを展開するのが通例である。

したがって、子どもたちの人間形成を考え

ると、学校と地域との関係を密接にすることが、かならずしも問題解決にならないように思える。具体的に、学校とギャング集団との関係を図式的にまとめるなら、

集団	営み	働き	短所	望まれる行動
ギャング集団	=遊び	人間性を育てる	一逸	脱—自発
学校	=学習	望ましい知識を授ける	非人間—的	受容

ととらえることも可能であろう。

つまり、地域に根をおろしたギャング集団と、そして学校とは両輪のような役割を果たして子どもたちの人間形成に関連しているのである。

換言するなら、ギャング集団が健在ならば、学校は、人間的なふれ合いを地域に委ねて知識を伝達する場となりうる。

しかし、地域の中とギャング集団が崩壊すると、現在の日本の学校がそうであるように、遊び仲間の問題も、学校として手を打たざるを得ない課題となり始める。

そうした結果、時としては学校の中に遊びの要素が加わり、地域に塾通いのような学びの性格が増すといった、学校と地域との役割が混同する形が生じてくる。したがって、学校、地域、家庭の役割関係を明確にすることが必要であろう。つまり、地域を子どもたちの生活の場として再生させることが、学校の地域化より望まれるのかもしれない。

調査レポート／地域

放送大学教授 深谷昌志

お茶の水女子大学大学院 齊藤智子

要約

① 地域での遊び経験を欠く

夜暗くなるまで遊んだことが、「1度もない」子どもが42%、これに「1～2度しかない」の30%を含めると、7割を超える子どもが、暗くなるまで遊んだことがない計算になる(図1)。



② 室内遊びが主流

自転車乗りを除くと、子どもたちの遊びはおしゃべり、ゲームなど、室内遊びが主流である(図2)。



③ 地域は遊び場として機能していない

となり近所の人を除くと、子どもたちは自分を知っていないと思っている。つまり、それだけ、地域は子どもにとって、生活空間としての機能を果たしていない(図16)。



④ 学校差は少ない



友だちと遊ぶのは、まず「おしゃべり」、そして「自転車乗り」というスタイルは、学校差をこえて、各地に共通している(表3)。

⑤ 異年齢の子と遊んでも3~4人と

近所の子どもは、遊んでも3~4人で、それ以上の多くの子どもと遊んでいる子どもは4割前後にとどまっている(図11)。



提 言

地域は、子どもにとって、遊びの場として機能していた。しかし、今回の調査結果は、地域が、そうした遊びの場としての機能を喪失し、子どもたちにとって見知らぬ土地となったことを明らかにした。地域をもたずに育

つ子どもたちの人間形成は、当然のことながら、多くの歪みを伴おう。地域性の喪失が、地域差をこえて全国的に進んでいるだけに、地域性の観点から、人間形成をとらえ直す必要がある。

サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
4年	334	325	659
5年	295	281	576
6年	282	285	567
計	911	891	1,802

調査概要

対象 ● 千葉・兵庫・奈良・新潟・広島・島根の
小学校4・5・6年生1802名
期間 ● 昭和58年9月
方法 ● 学校通しによる質問紙調査

1. 地域の遊び



変わってきた遊びの姿

子どものころというと、どういうわけか、学校での授業場面などさっぱり記憶になく、暗くなるまで遊んだ野辺や田んぼ、神社などばかりがなつかしくまぶたに浮かんでくる。今はどこにおいても、子どもたちが戸外で遊ぶなくなったという嘆きの声が聞かれるようになった。自分自身の経験を通して、自然の中で遊ぶことによって養われた情感や、近所の子どもたちと群れて遊びまわって過ごした日々のもつ意味は少なくないと思う。家の中にこもり、ぼんやり過ごしている時間が多くなった、また、クラスで一緒になったごく親しい二、三人の子どもとしか遊ばない、放課後の遊びには電話予約が必要、など、今の子どもたちの話をきくと、子ども時代に体験しておくべき多くの事柄が抜け落ちている

のではないかととても不安になる。果たして実態はどのようなのであろうか。

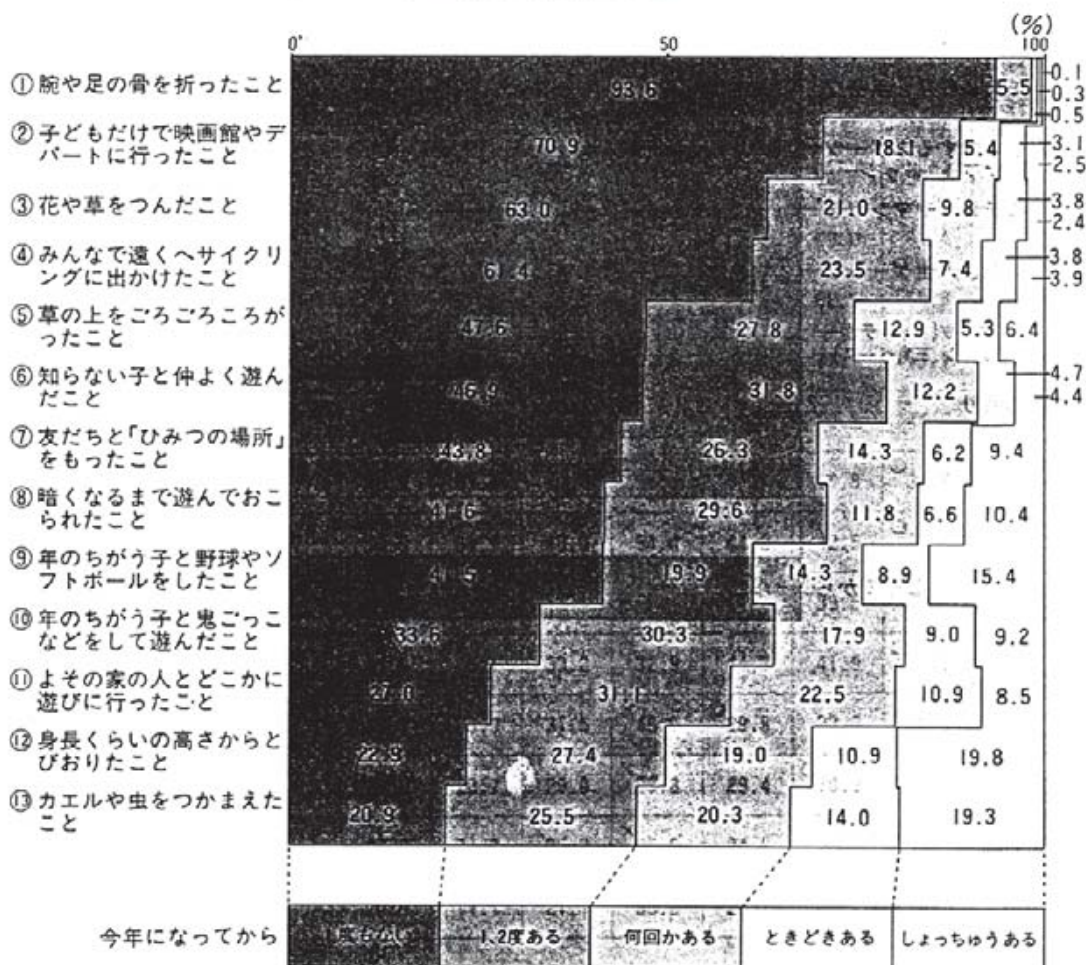
図1に示したのは、①から⑬までの遊びに
関係した体験について、その度合いをたずねたものである。調査時点が9月初めであるから、約8カ月間、「暗くなるまで遊んでおこられたこと」の全くない子どもが42%、1、2度しかない子どもまで含めると、71%にも及ぶ。昔ならば4、5年生は遊びざかり、遊びに夢中になって気がついてみるとあたりはまっ暗、家に帰っても入れてもらえない、ということがしょっちゅうであったように思うが、今の子どもはそんなに遊びに夢中にならないのか、さっさと切り上げて帰ってくるようである。塾やけいこごとに通う子どもの多くなっている事情ともかかわっているのでは

ろう。さすがに、⑫「身長くらいの高さからとびおり」たり、⑬「カエルや虫をつかまえたこと」のない子どもは少数派である。しかし、そうたびたびあることでもないらしい。また、仲間とサイクリングで遠征したり、知らない子どもと仲よく遊んだりといった機会も少ないようである。年齢のちがう子どもともあまり遊んでいない。

それでは、子どもたちは日常、何をして遊んでいるのだろうか。遊びを大まかに分類した上で子どもにきいた結果(図2)を見ると、子どもたちの遊びの種類がいかに貧困である

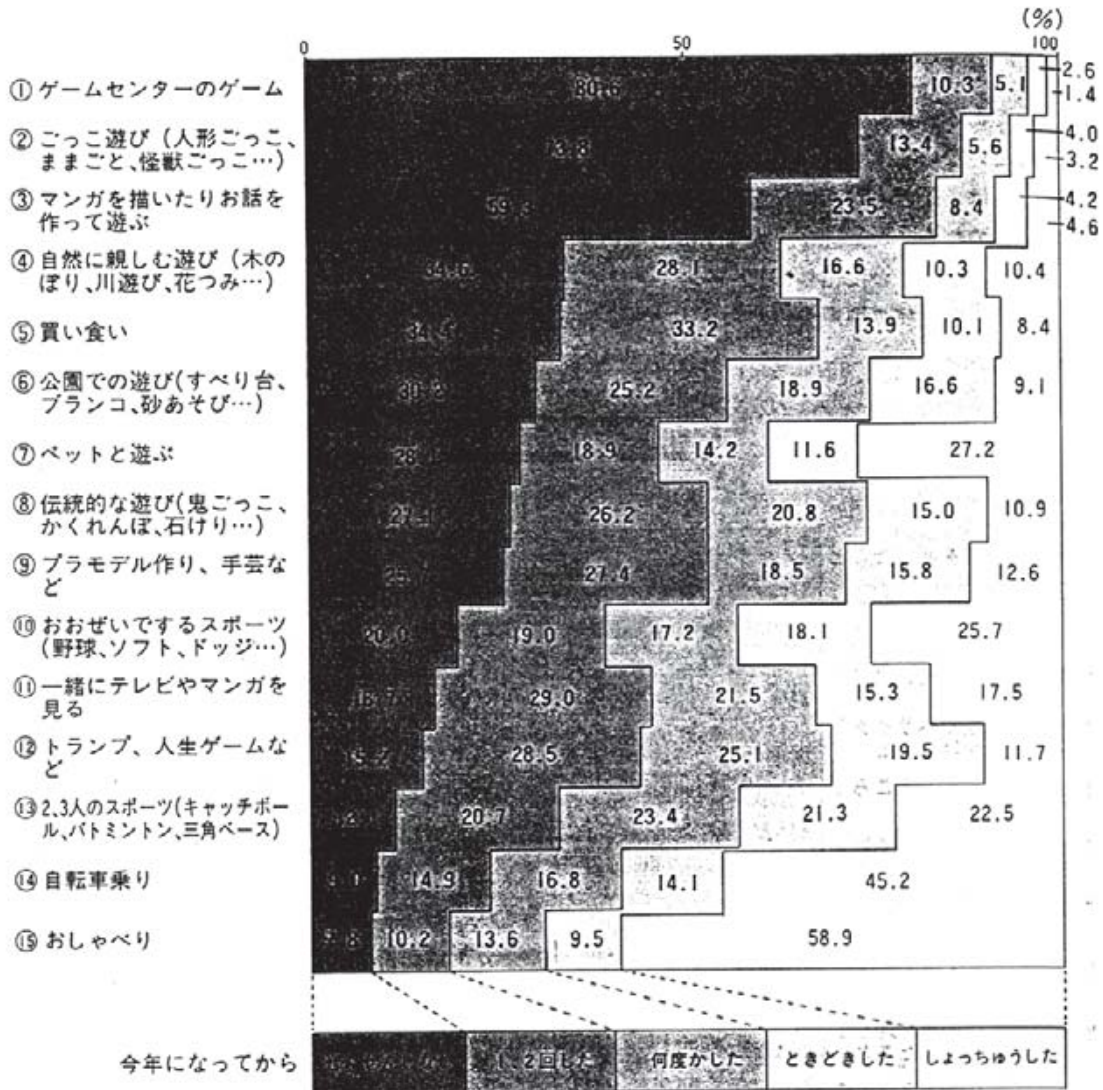
かがよくわかる。「ときどき・しょっちゅうしている」が50%を超えるのは「おしゃべり」(68%)と「自転車乗り」だけで、40%台を含めても「2、3人のスポーツ」、「おおぜいにするスポーツ」、「ペットと遊ぶ」ぐらいまでが、友だちとのふだんの遊びとみてよいだろう。ごっこ遊びなどは幼稚と見られているのか、ぜんぜんしていない子どもも74%もいるし、自然の中での遊びや昔ながらの鬼ごっこ、石けりなども影をひそめてしまった感がある。子どもの遊びは、今や種類も場所も限られたものになってきたようである。

図1・遊びの経験



て
に
ね
か
こ
も
遊
は
と
う
ら
よ
多
あ

図2・遊びの種類



地域別の実態

さて、こうした子どもの遊びの衰退はどのようにしてもたらされたものなのか。地域の自然環境や居住環境によって説明づけられるものだろうか。ここで学校別データを比較し、地域の実情とあわせてそのことを少し検討してみたい。まず先ほどの遊び体験とのクロスをみよう。表1は、「今年になって一度もない」子どもの数値を学校別に示したものである。調査にあたっては、ようすのちがった地

域をとりまぜて依頼したつもりであったが、さほど数字の開きがない印象を受ける。それでも20%から30%の差があるものもあるので、傾向を読みとり易くするため、比較的数値の低い、つまり経験している度合いの高い学校に○、その逆のものに×の印をつけてみた。すると、意外にも○の多かったのが、大きな新興住宅地区を校区にもつ千葉のA校であり、同じように大都市のベッドタウン的性格の強

表1・遊び体験×学校

	全 体	A校 千葉	B校 姫路	C校 奈良	D校 新潟	E校 広島	F校 島根	G校 島根
①腕や足の骨を折ったこと	93.6	93.7	93.7	94.2	92.4	94.7	96.4	92.0
②子どもだけで映画館やデパートに行ったこと	70.9	○54.4	×85.3	×88.8	○63.8	69.0	81.4	79.1
③草や花をつんで遊んだこと	63.0	○56.4	61.5	×68.1	67.4	62.9	○50.9	×72.0
④みんなで遠くにサイクリングしたこと	61.4	○49.3	58.1	×73.5	○57.4	71.4	73.1	×88.0
⑤草の上をごろごろころがったこと	47.6	○38.8	×52.4	×55.8	51.0	○40.2	44.6	44.0
⑥知らない子と仲よく遊んだこと	46.9	○43.1	44.6	×53.8	48.4	46.8	○38.5	×52.0
⑦友だちと「ひみつの場所」をもったこと	43.8	○38.9	40.0	×54.4	44.2	42.5	○36.8	×64.0
⑧暗くなるまで遊んでおこられたこと	41.6	39.9	○33.4	×50.4	41.6	○39.5	47.4	×76.0
⑨年のちがう子と野球やソフトなどをしたこと	41.5	×46.1	39.2	○32.9	44.7	41.9	○29.8	×66.6
⑩年のちがう子と鬼ごっこなどをして遊んだこと	33.7	○30.9	31.5	×45.0	○29.8	33.9	35.1	×52.0
⑪よその家の人とどこかに遊びに行ったこと	27.0	○20.7	29.0	×33.8	29.4	○18.9	28.1	×52.0
⑬身長くらいの高さからとびおれたこと	22.9	21.8	×25.7	×25.9	24.8	○16.8	○12.3	24.0
⑬カエルや虫をつかまえたこと	20.9	○14.1	21.1	×30.8	20.2	×22.7	19.3	○8.0

「一度もない」割合

※各項目につきパーセンテージの高い学校2校に×、低い学校2校に○をつけた。

い地域でありながら最も×の多かったのが、奈良のC校であった。また、同じ村内にある二校、F、Gも全くちがう数値を出している。これだけでは理由がよくわからないので、各地域の事情を、表2「歩いて5分以内にある」環境、付表「各地域の概要」及び図3「居住年数とのクロス」と照らし合わせながら見ていた

だきたい。

各地域について簡単に説明を加えておくと、A、B、C校はいずれも農村と住宅地区から成る。居住者の数としては住宅区のほうが多く、特にA校は最近移ってきた生徒がほとんどである。D校は新潟県の小都市にあり、駅前を中心に商店街、住宅区が広がっている。

表2・環境×学校

(%)

順位	A校 千葉県	B校 姫路市	C校 奈良県	D校 新潟県	E校 広島県	F校 島根県	G校 島根県
1	遊べる道路 (91.3)	道路 (84.7)	道路 (88.0)	道路 (81.7)	道路 (78.8)	田・畑 (91.1)	道路 (88.0)
2	野原・空地 (86.8)	友だちの家 (72.7)	田・畑 (77.2)	田・畑 (72.5)	野原・空地 (66.7)	川・海・池 (81.1)	山・林・森 (87.5)
3	友だちの家 (67.4)	児童公園 (54.1)	野原・空地 (74.9)	友だちの家 (66.3)	友だちの家 (63.6)	道路 (78.9)	田・畑 (84.0)
4	児童公園 (67.4)	川・海・池 (52.5)	児童公園 (72.9)	川・海・池 (54.2)	川・海・池 (49.4)	山・林・森 (77.1)	川・海・池 (80.9)
5	山・林・森 (31.4)	野原・空地 (52.2)	友だちの家 (65.0)	野原・空地 (45.9)	田・畑 (43.2)	友だちの家 (46.6)	友だちの家 (59.2)
6	田・畑 (25.0)	田・畑 (51.9)	川・海・池 (44.3)	児童公園 (41.5)	商店 (41.2)	商店 (32.9)	商店 (39.2)
7	商店 (23.4)	山・林・森 (30.3)	商店 (29.9)	商店 (41.4)	山・林・森 (37.2)	野原・空地 (30.9)	野原 (35.0)
8	学校 (14.5)	商店 (24.4)	学校 (22.1)	神社・寺 (37.8)	児童公園 (34.7)	神社・寺 (23.6)	神社・寺 (28.0)
9	スーパー・商店街 (10.5)	スーパー・商店街 (24.4)	スーパー・商店街 (19.6)	スーパー・商店街 (20.8)	神社・寺 (19.9)	学校 (16.1)	町のグラウンド (25.0)
10	神社・寺 (6.0)	神社・寺 (16.0)	神社・寺 (19.3)	町のグラウンド (15.2)	スーパー・商店街 (19.8)	スーパー・商店街 (9.8)	学校 (18.5)
11	川・海・池 (3.6)	学校 (15.2)	山・林・森 (9.7)	学校 (12.8)	学校 (19.8)	児童公園 (4.0)	児童公園 (11.1)
12	町のグラウンド (2.6)	町のグラウンド (14.3)	町のグラウンド (2.6)	ゲームセンター (7.4)	町のグラウンド (13.1)	ゲームセンター (0)	スーパー・商店街 (9.1)
13	ゲームセンター (0.6)	ゲームセンター (9.6)	ゲームセンター (0.8)	山・林・森 (6.7)	ゲームセンター (3.6)	町のグラウンド (0)	ゲームセンター (0)

「歩いて5分以内のところにある」割合

地元にある化学工場やスキー工場などに勤める住民が多い。E校区は瀬戸内臨海工業地帯の中にある、山と海にはさまれた小さな町。E校、G校は同じ村内にある学校であるが、G校のほうが校区は広く、生徒数は少ない。鉄道の駅からも離れていて、子どもの家は山中に点在している。したがって学校から帰っ

てからは遊び友だちを得られない子どももいる。遊び体験の不足も、こうした事情を反映しているといえよう。それにしても、自然環境としては一番恵まれていないはずのA校が、最も遊びの経験率が高いのは興味深い。もっとも、最近では自然に恵まれた地域でも、子どもにとって格好な遊び場に思える川や池、田

付表・各地域の概要

	所在地	サンプル数	学 校	地 域 の 状 況
A 校	千葉県 佐倉市	369名	昭和55年開校の新設校。旧村（農村）部の生徒は4.3%でほとんどが新興住宅区の生徒。全校生徒808名の中規模校。	東京・神奈川等から移ってきたサラリーマンが多く、現在も開発の続いている住宅地と野菜作りを中心とする農村から成る。
B 校	兵庫県 姫路市	308名	全校生徒1236名の大規模校。校区には農村もあるが、大部分が、県営市営のアパート、住宅区から成る。	姫路駅からバスで20分ほどの住宅地。姫路市内に勤めるサラリーマンが多い。周囲は、山、川など自然に恵まれている。
C 校	奈良県	282名	校区は旧村と新興住宅地とから成る。児童数は近年急激に増え、全校836名。	10年ほど前から近鉄線の駅を中心に一戸建て住宅団地ができ、大阪方面勤務者のベッドタウン化してきた。
D 校	新潟県	488名	生徒数1249名の大規模校。父親はサラリーマンが多く、その他、商店主、農家など。異学年交流の場として“子どもまつり”、“雪まつり”がある。	駅前を中心に商店街があり、そのまわりに住宅区が広がっている。市内には2本の川が流れ、田畑も多い。
E 校	広島県	264名	全校生徒545名各学年2～3学級。親の職業は会社員が多い。その他商業関係、公務員、兼業農家等。漁業も少しはいる。福祉協力校。	古くは漁村、宿場町として発達してきた瀬戸内海沿岸の小さな町。戦後、工場進出、宅地造成とずいぶん趣きを変えたが、なお、山、海、川と自然に恵まれている。
F 校	鳥根県 郡 部	57名	全校生徒104名の小規模単級学校。過疎化進行のため、年々生徒数が減っている。S42年に分校を統合。26名がバス通学。	広島県との県境に位置する中国山地内のへき地。村内にはF、Gの2校の小学校がある。村全体の面積、73.9km ² （G校区のほうが46.7km ² と倍近く広い）人口2933人（1003戸）。零細農家が多く、林業、木工業の他、酪農、養魚等、多角経営も試みている。役場、国鉄駅はF校区内。
G 校	鳥根県 郡 部	28名	全校生徒64名。3、4年が複式学級。S49年までに分校3校を統合。23名がバス通学（2～10km）。陸上に力を入れている。	

畑、空き地などが、所有者の関係や「危険」などの理由で、遊泳や立ち入りを禁止されているところが多い。こうした背景も考慮に入れる必要がある。

表3は、友だちとの遊びの学校別データである。多少の数値の差はあるが、どこの地域も順位はほぼ似通っていて、あまり地域差はないといえよう。その中で、地域によって順位に差が見られるのは「伝統遊び」、「自然に親しむ遊び」、及び「一緒にテレビ・マンガを見る」である。遊び体験の少なかった奈良のC校は、ここでも「自然に親しむ遊び」、「伝統遊び」の順位が低く、数値も15%ほどである。

図4は、こうした子どもたちの遊びはたいして3、4人までの仲間でなされていることを示している。しかし、必ずしも子どもたちは少人数で遊ぶことを望んでいるわけではなく、できればもう少し多い人数で遊びたいと思っているのである。そうできない理由には、当然、塾の存在が考えられる。今回の調査サンプルで塾（けいこごとを含む）に通っていない子どもは24%、3日以上通っている子どもが40%いる。

放課後、3、4人でおしゃべり、ボール・ゲームなどをして、時間がくると塾に通う、こうした姿が彼らの日常であると考えてよいだろう。

図3・居住年数×学校

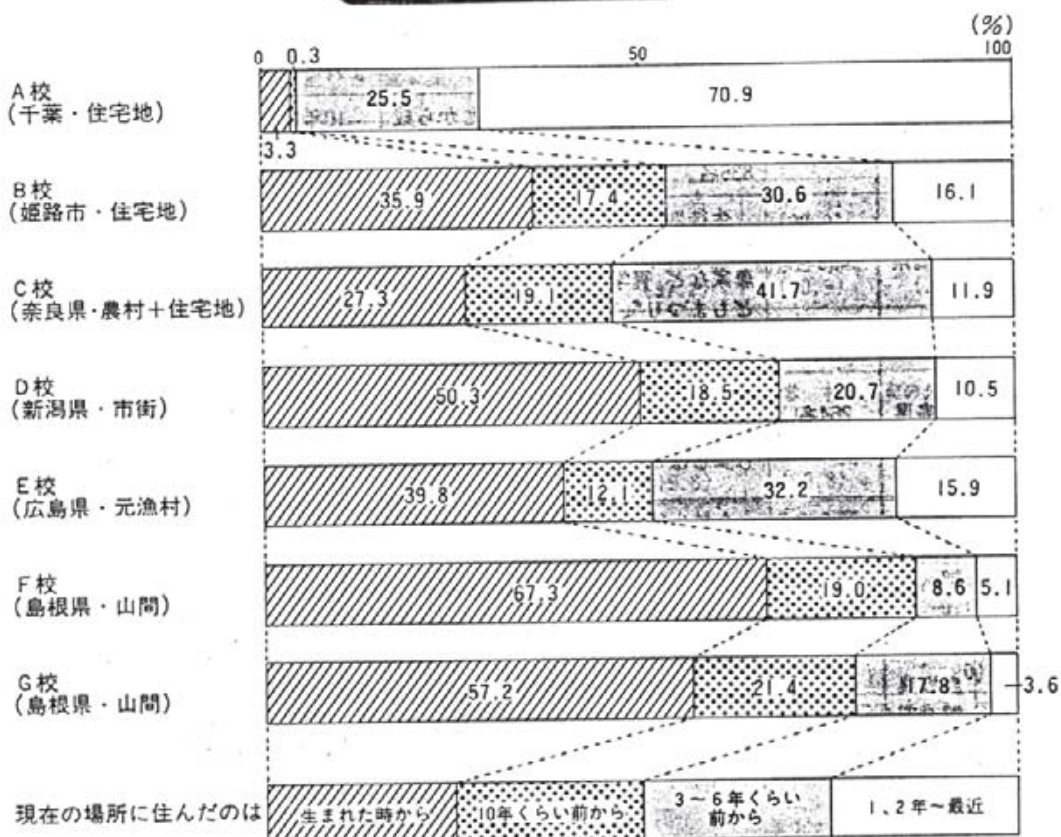


表3・友だちとの遊び

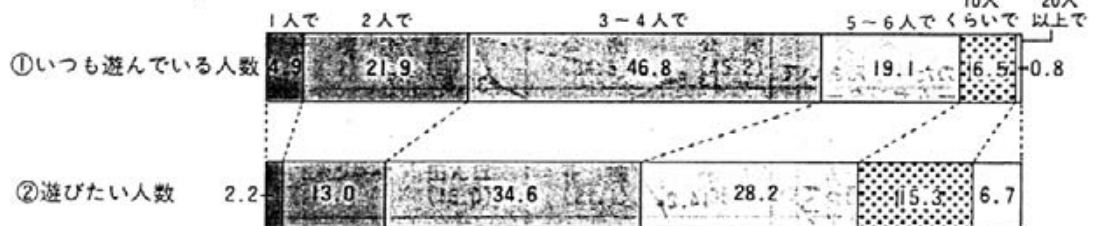
(%)

順位	A 校 千葉	B 校 姫路	C 校 奈良	D 校 新潟	E 校 広島	F 校 島根	G 校 島根
1	おしゃべり (69.1)	おしゃべり (66.3)	おしゃべり (59.2)	おしゃべり (70.6)	おしゃべり (73.1)	おしゃべり (80.7)	おしゃべり (65.4)
2	自転車乗り (61.3)	自転車乗り (56.0)	多勢のスポーツ (55.3)	自転車乗り (69.0)	自転車乗り (67.7)	自転車乗り (54.5)	自転車乗り (38.4)
3	多勢のスポーツ (46.2)	2,3人のスポーツ (46.6)	2,3人のスポーツ (43.1)	2,3人のスポーツ (42.5)	2,3人のスポーツ (47.7)	ペットと遊ぶ (44.8)	多勢のスポーツ (33.3)
4	2,3人のスポーツ (45.1)	多勢のスポーツ (43.8)	ペットと遊ぶ (41.0)	多勢のスポーツ (38.5)	Xテレビやマンガ (43.4)	Xテレビやマンガ (37.9)	●伝統遊び (29.6)
5	ペットと遊ぶ (34.4)	ペットと遊ぶ (39.4)	自転車乗り (38.3)	Xテレビやマンガ (32.4)	多勢のスポーツ (41.3)	多勢のスポーツ (32.8)	O自然に親しむ遊び (29.6)
6	家でのゲーム (34.1)	家でのゲーム (36.8)	Xテレビやマンガ (30.5)	ペットと遊ぶ (31.6)	ペットと遊ぶ (40.3)	2,3人のスポーツ (29.3)	ペットと遊ぶ (25.9)
7	プラモデル・手芸 (27.9)	公園での遊び (32.6)	家でのゲーム (29.3)	プラモデル・手芸 (29.0)	●伝統遊び (34.5)	●伝統遊び (29.0)	Xテレビやマンガ (22.2)
8	●伝統遊び (27.8)	Xテレビやマンガ (32.0)	プラモデル・手芸 (28.0)	家でのゲーム (27.1)	家でのゲーム (32.0)	O自然に親しむ遊び (28.0)	家でのゲーム (19.2)
9	公園での遊び (27.6)	プラモデル・手芸 (29.1)	公園での遊び (23.1)	●伝統遊び (27.1)	プラモデル・手芸 (29.2)	家でのゲーム (27.5)	プラモデル・手芸 (19.2)
10	Xテレビやマンガ (27.5)	●伝統遊び (23.9)	買い食い (18.8)	公園での遊び (24.0)	買い食い (25.9)	プラモデル・手芸 (26.3)	2,3人のスポーツ (14.8)
11	O自然に親しむ遊び (21.0)	買い食い (21.7)	O自然に親しむ遊び (15.0)	O自然に親しむ遊び (19.1)	O自然に親しむ遊び (25.7)	公園での遊び (23.6)	マンガ・お話し (7.4)
12	買い食い (12.2)	O自然に親しむ遊び (20.9)	●伝統遊び (14.7)	買い食い (18.8)	公園での遊び (23.2)	ごっこ遊び (12.3)	買い食い (3.7)
13	マンガ・お話し (8.2)	マンガ・お話し (13.6)	マンガ・お話し (7.6)	マンガ・お話し (7.3)	ごっこ遊び (9.4)	買い食い (10.4)	ゲームセンター (0)
14	ごっこ遊び (7.1)	ごっこ遊び (10.5)	ごっこ遊び (4.7)	ごっこ遊び (5.4)	マンガ・お話し (7.9)	マンガ・お話し (10.4)	ごっこ遊び (0)
15	ゲームセンター (3.0)	ゲームセンター (6.4)	ゲームセンター (7.6)	ゲームセンター (3.4)	ゲームセンター (5.0)	ゲームセンター (5.6)	公園での遊び (0)

「今年になってから、ときどき・しょっちゅうした」割合
 伝統遊びに●、自然に親しむ遊びに○、テレビやマンガにXをつけた。

図4・遊び友だちの人数

(%)



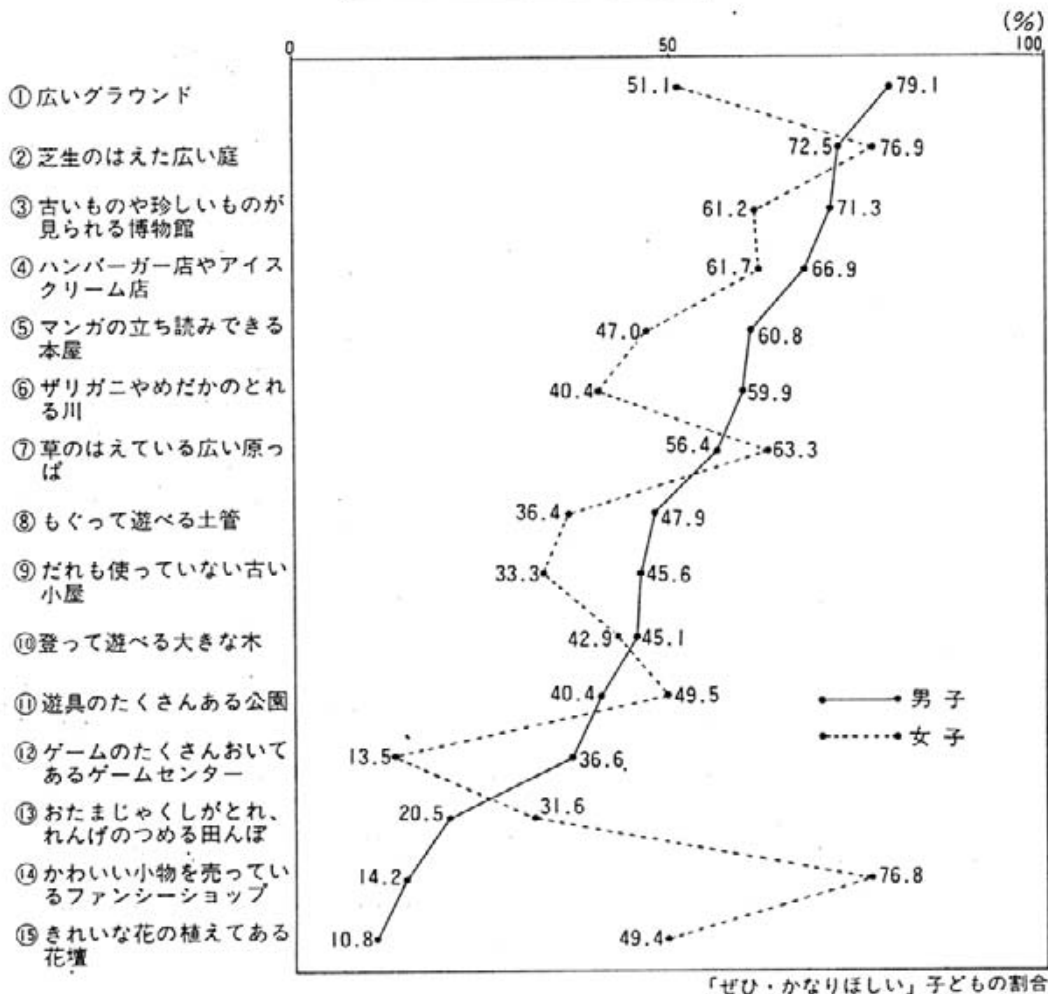
子どもが地域に望むもの

図5は、近所にほしいものをたずねた結果を男女別にグラフ化したものである。男の子が最もほしがっているものが「広いグラウンド」である。要するにのびのびと野球のできる場所がほしいというのが、彼らの切実な願いなのであろう。思うぞんぶんゲームをしたくても、場所がない、という彼らの思いが伝わってきてかわいそうに思えてくる。そのつぎが、なぜか、「芝生のはえた広い庭」であり、

「広い」という語に反応するのかとも思えるが、同じ「広い」という形容がついても、「草のはえている原っぱ」はいくぶん数字が落ちている。「鬼ごっこ」や虫とりなど、多目的に遊ぶには、野原が一番いいように感じるが、現代っ子はきれいに整地されていたり、芝生が植えられているほうが好きなのである。

3番目に「博物館」のはいっているのも意外な気がする。動物園や水族館なども、項目

図5・近所にほしいもの



「ぜひ・かなりほしい」子どもの割合

に入れると、たぶん高い順位に上がってくるのだろう。新しいもの、珍しいものを見たいという子どもの欲求は、今も昔も変わりはないであろう。ただ、今の子どもたちは自然の状態でものを見たり、探したりするより、ガラスケースに入れて陳列されたものを眺めて知識欲を満足させるのにすっかり慣れてしまった感がある。

ひと昔前なら子どもの喜びそうな土管や古い小屋、大きな木なども、遊び方がわからないのだろうか、かなり数値が下がっていて、

そのかわり4番目に上がっているのが「ハンバーガー店やアイスクリーム店」である。女子の第2位が「ファンシーショップ」であるあたりも、「今の子ども」を感じさせる。

この結果を、さらに地域別に示したものが、表4である。これにはつぎのような傾向がみられる。すなわち、当然ともいえるが、各地域にそれぞれ欠けている環境をほしがっている、ということである。千葉・A校の子どもは、「ハンバーガー店」や「ファンシーショップ」よりも、「広い原っぱ」、「小川」、「大きな木」、

表4・地域(学校)別・近所にほしいもの

(%)

順位	A校 千葉・住宅地	B校 姫路・住宅地	C校 奈良・住宅+農村	D校 新潟・小都市	E校 広島・元漁村	F校 島根・山間	G校 島根・山間
1	芝生の広い庭 (77.3)	広い庭 (75.7)	広い庭 (68.6)	広い庭 (71.8)	広い庭 (79.3)	広い庭 (84.2)	博物館 (80.0)
2	広いグラウンド (71.2)	博物館 (67.9)	ハンバーガー店 (64.5)	博物館 (65.8)	ハンバーガー店 (76.1)	ハンバーガー店 (84.2)	広い庭 (76.0)
3	博物館 (67.1)	グラウンド (62.1)	グラウンド (60.2)	ハンバーガー店 (63.2)	博物館 (69.1)	ゲームセンター (84.1)	ハンバーガー店 (68.0)
4	広い原っぱ (66.2)	ハンバーガー店 (61.7)	博物館 (58.3)	グラウンド (62.5)	グラウンド (68.0)	グラウンド (81.2)	野原 (56.0)
5	ざりがにのいる小川 (64.2)	本屋 (55.9)	本屋 (46.9)	野原 (61.1)	本屋 (64.6)	本屋 (80.4)	本屋 (56.0)
6	遊具のある公園 (58.0)	野原 (55.8)	野原 (38.7)	小川 (53.9)	小川 (63.4)	博物館 (76.8)	ファンシーショップ (56.0)
7	のぼれる大木 (51.1)	公園 (54.1)	大木 (37.4)	本屋 (52.1)	野原 (63.3)	野原 (71.4)	グラウンド (52.0)
8	もぐれる土管 (50.2)	大木 (48.0)	ファンシーショップ (35.9)	ファンシーショップ (41.8)	ファンシーショップ (54.0)	公園 (66.7)	小川 (45.9)
9	本屋 (48.3)	ファンシーショップ (47.2)	公園 (33.6)	古い小屋 (41.8)	土管 (53.6)	ファンシーショップ (66.7)	ゲームセンター (40.0)
10	古い小屋 (46.5)	小川 (41.6)	小川 (32.6)	土管 (37.2)	大木 (51.3)	小川 (62.5)	大木 (29.1)
11	ハンバーガー店 (46.3)	土管 (41.1)	古い小屋 (31.7)	大木 (35.3)	古い小屋 (46.6)	土管 (56.2)	花壇 (24.0)
12	ファンシーショップ (45.0)	花壇 (33.7)	土管 (30.2)	公園 (34.5)	公園 (45.2)	大木 (55.4)	公園 (16.0)
13	遊べる田んぼ (36.5)	古い小屋 (31.1)	花壇 (24.1)	ゲームセンター (24.6)	田んぼ (36.6)	花壇 (49.1)	土管 (12.0)
14	花壇 (36.2)	ゲームセンター (26.8)	田んぼ (16.0)	花壇 (21.1)	花壇 (35.4)	古い小屋 (42.1)	田んぼ (4.0)
15	ゲームセンター (19.5)	田んぼ (26.6)	ゲームセンター (14.3)	田んぼ (17.8)	ゲームセンター (29.6)	田んぼ (33.9)	古い小屋 (0)

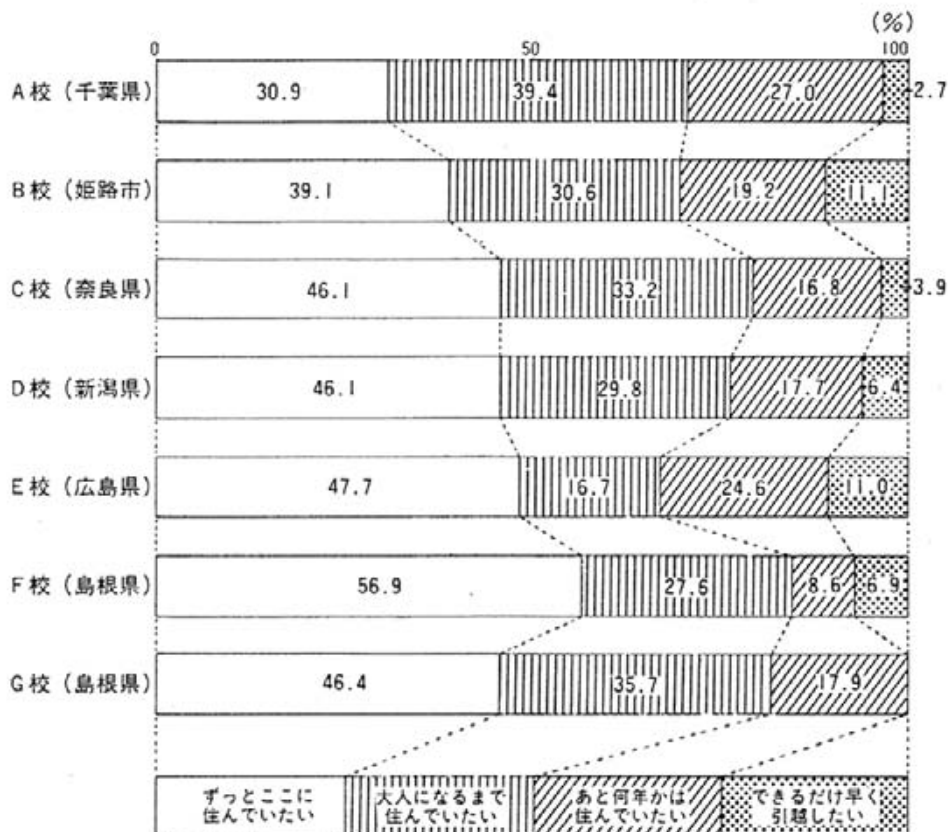
「かなり・ぜったいほしい」割合

「土管」をほしがっているし、島根・F校では「ハンバーガー店」、「ゲームセンター」を、かなりの子どもがほしがっている。どの地域もあまりほしがっていないのが、公園である。児童公園はたいていの校区にあるが、小学校の5年ごろにもなると、遊具があり、小さい

子どもの遊んでいる公園は魅力がなくなっているようである。

こうした結果を見ると、子どもたちは、必ずしも今の地域環境に満足しているわけではないことがわかる。では、土地に対する愛着は薄いかということ、図6では、現在の土地に

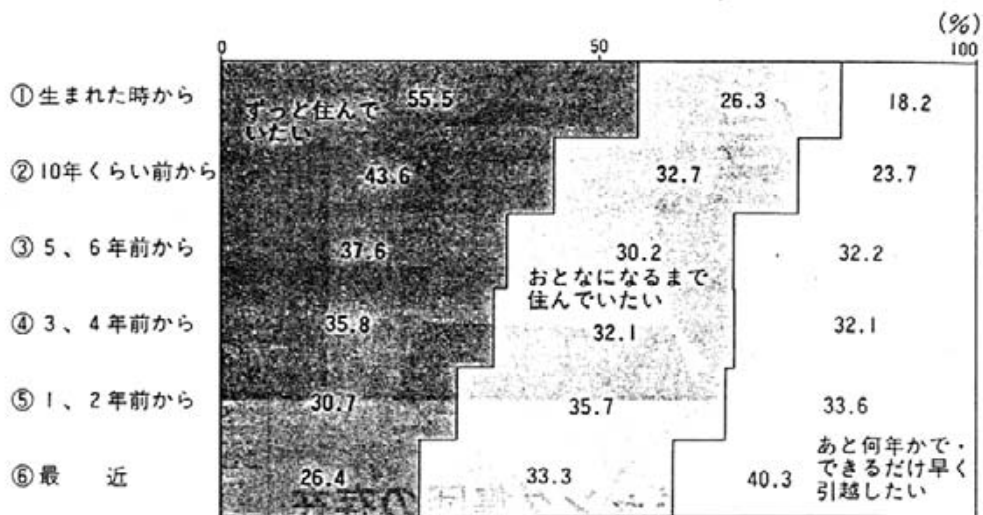
図6・土地への愛着×学校



住んでいたいと願う子どもは、「おとなになるまで」を含めると、どの地域も7割から8割に及ぶ。しかし、これは居住年数との関連でとらえなくてはならないであろう。図7によると、土地への愛着は居住年数と明らかに相関がある。なじめばなじむほど、その環境

を急変させるのがいやなのは、おとなも子どもも同じであるから、当然ともいえるが、この数字を逆に見ると、知らない土地から越してきて完全にその土地になじむには、子どもでも結構時間がかかるとも読みとれよう。

図7・土地への愛着×居住年数



2. ギャング・エイジのゆくえ



ギャング集団の存在

異年齢で構成された近所の遊び仲間集団—ギャング集団の姿が見られなくなったのは、いつごろからであろうか。10数年前までは、それでもまだ各地にギャング集団のなごりがあったように思う。今となってはどこの子どもだったのか名前も思い出せないが、近くの10数人の子どもらと、田んぼで鬼ごっこや雪合戦などを楽しんだ記憶が筆者にもある。年齢も小学校にあがるかあがらないかの小さな子どもから、上は中学生くらいの子までいたような気がする。しかし、そのころには典型的なガキ大将の存在はすでになく、またそう固定的な集団でもなかった。いつも「よせて」といって仲間に入れてもらっていた。

かつての近隣遊び仲間集団は、さまざまな教育機能をもっていたようである。年上の子

どもは年下の子をいたわり、遊びのやり方や技術を教えてリーダーシップを発揮し、小さい子どもは年上の子についてまわりながら新しい体験を積み、身体を鍛え、危険防止の知恵を学び、集団の中でもまれながら、社会性や生きる上でのたくましさを身につけていった。現代の「地域」はそうした教育力を全く失ってしまったのだろうか。本章ではギャング集団についての実態を調べていきたい。

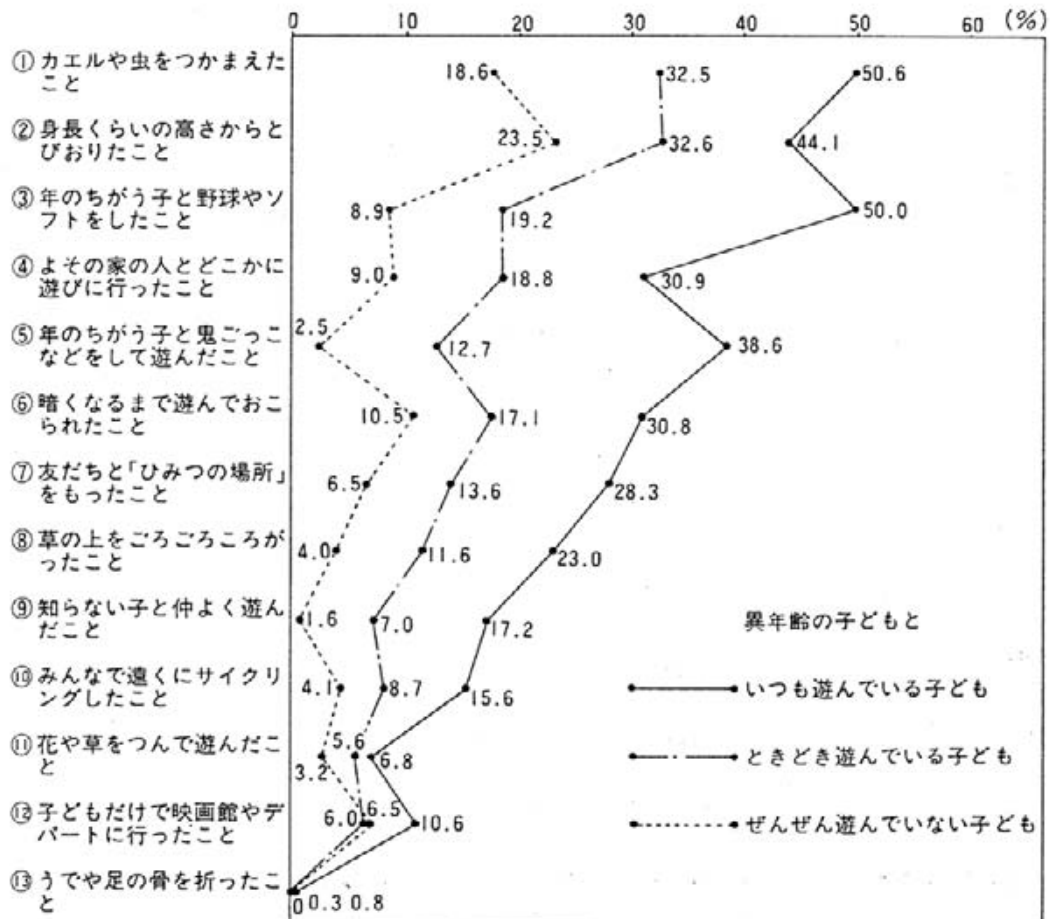
図8は、遊び体験と異年齢の子どもと遊んでいる度合いとのクロスである。一目でわかるように、異年齢の子どもと遊んでいない子どもは、体験の量がきわめて少ない。このちがいをみると、今でも戸外での豊富な体験は、異年齢の子どもたちによって伝えられている

可能性が高い。図9は、遊びの種類とのクロスである。これを見ても、異年齢の子ともと遊んでいない子どもは、「自然に親しむ遊び」、「公園での遊び」、「伝統的な遊び」、「野球、ソフト、ドッジ」など、特に戸外で体を動かす遊びにおいて、遊んでいない割合が高い。

ここまで見てくると、こうした集団は、あ

る地域に固まっているのではないかといった疑問がでてくる。しかし、必ずしもそうでないことは図10によって明らかである。児童数の少ないG校では、「たまにある」+「ぜんぜんない」が60%を超えているが、他の地域では、その割合にたいしたちがいは見られない。異年齢の子ともといつも遊んでいる子ども、反対に全く遊んでいない子どもは、

図8・遊び体験×異年齢の子ともとの交遊



今年になって①~⑬の遊び体験が「ときどき・しょっちゅうある」割合

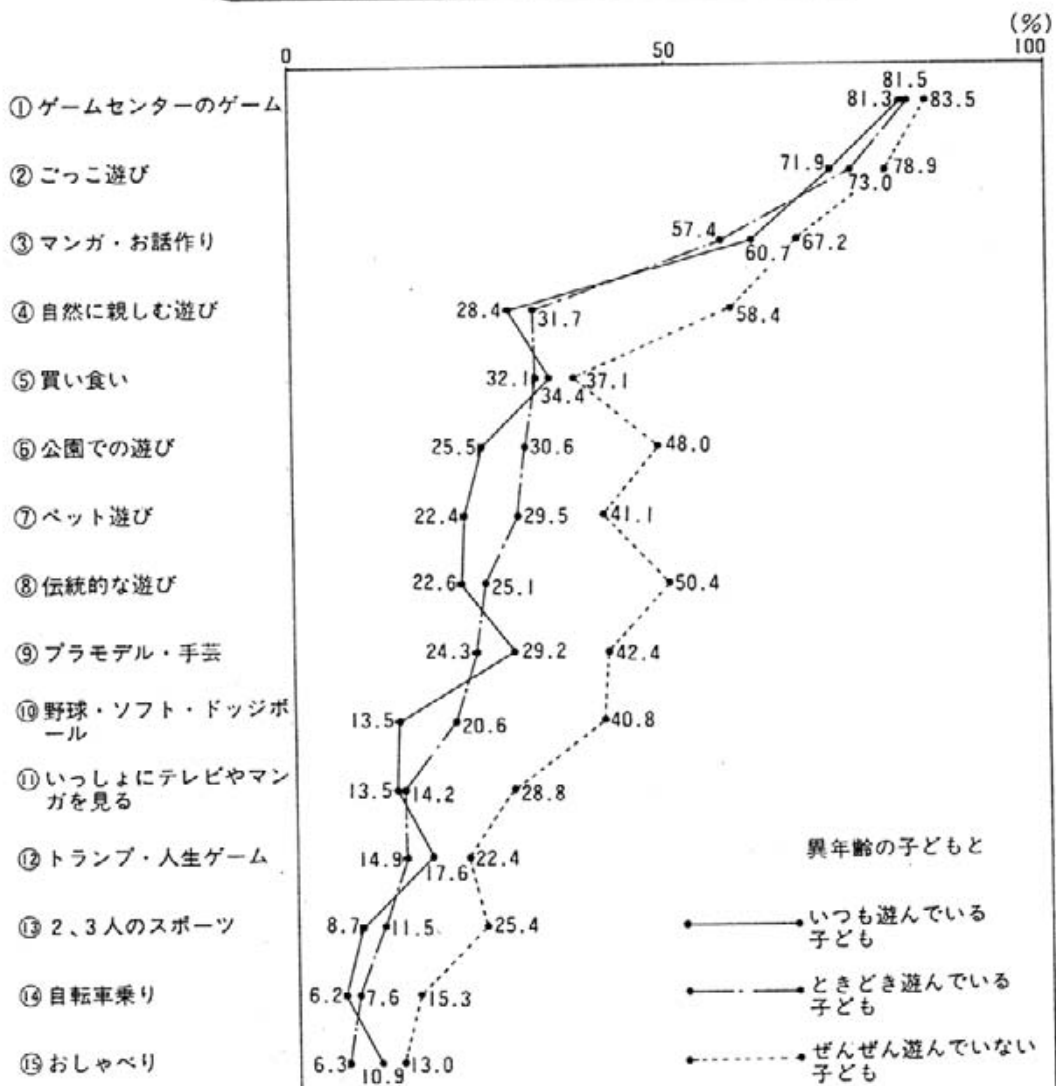
り
り
突
ら、
ナ
カ
は
た
く
ん
か
子
ら
は、
る

どの地域にも少数存在している。こうした異年齢の子どもと「いつも」遊んでいる子どもたちは、「ときどき」や「ぜんぜん」遊んでいない子どもたちに比べ、遊び友だちの数は多めである（図11）。

これまでのデータで、異年齢で構成された小集団はどこの地域にも存在することがいえそうであるが、それでは、この遊び仲間集団

には、かつてのような効用はあるのか。図12は、やはりこうした年のちがう子どもとの遊びが、若干の自信の差となって表れていることを示している。しかし、さほどのちがいはない。人間形成上に及ぼす影響は、そうすぐに数字となって表れてくるものではないのかもしれない。

図9・遊びの種類×異年齢の子どもとの交遊



今年になって①～⑮の遊び体験を「ぜんぜんしたことのない」割合

図10・異年齢の子どもとの交遊×学校

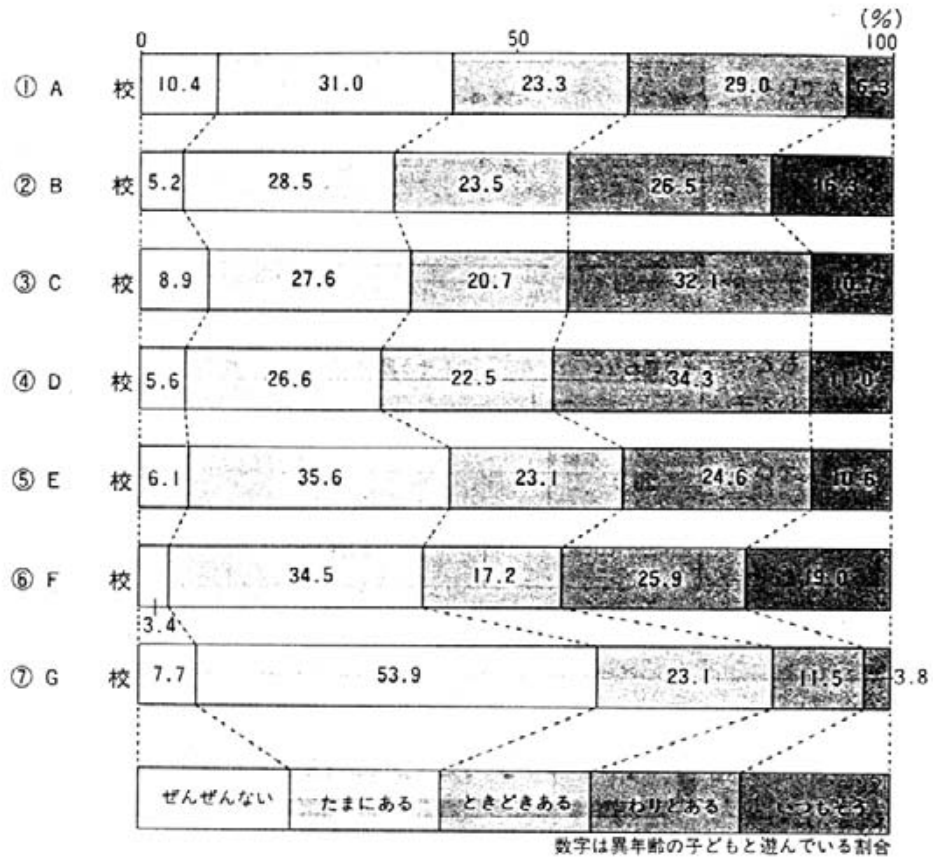


図11・遊び友だちの人数×異年齢の子どもとの交遊

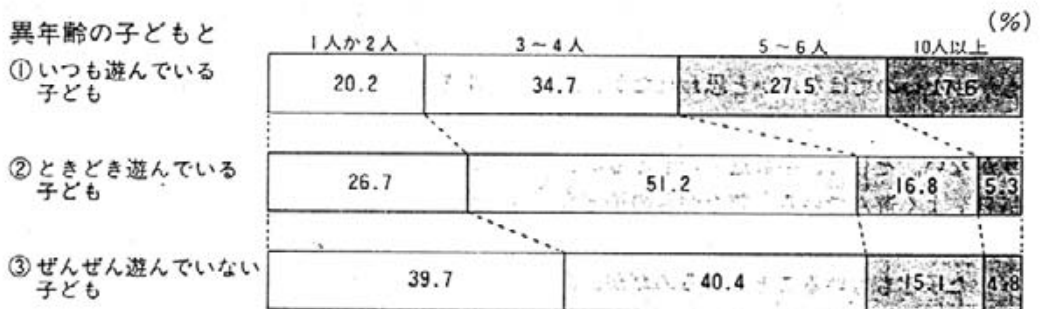
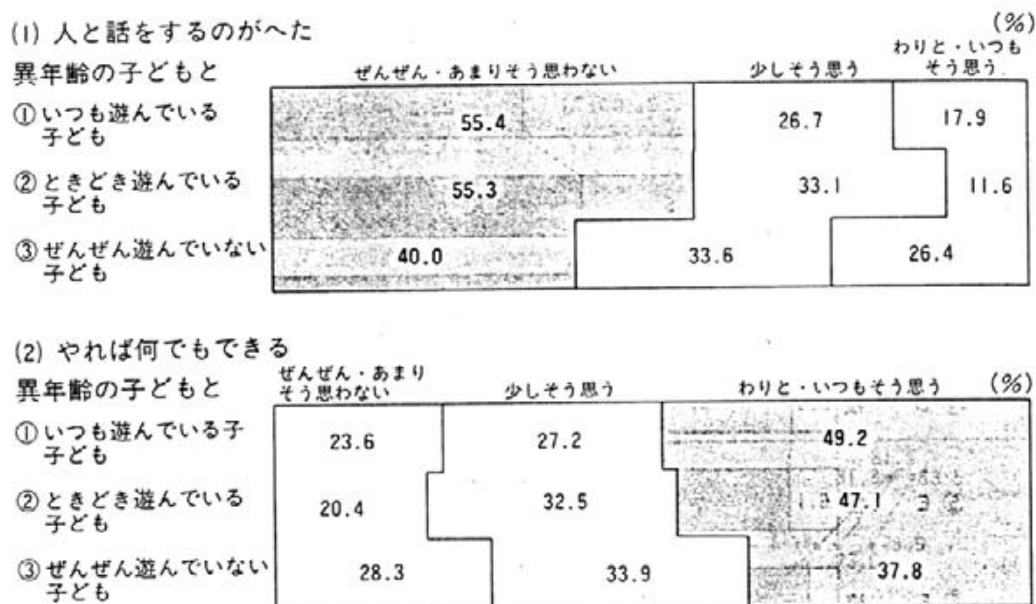


図12・自信×異年齢の子どもとの交遊



ギャングたちの日常

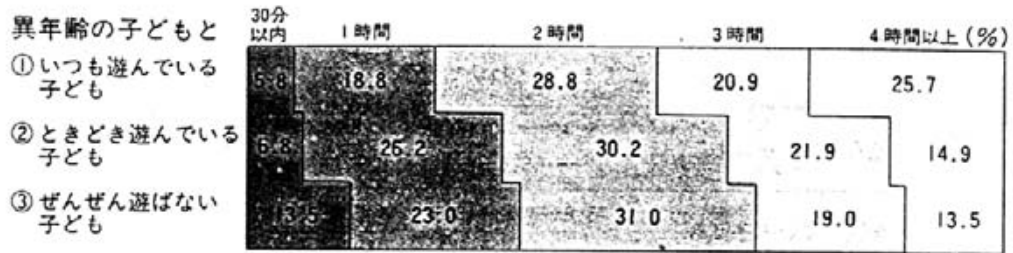
つぎに、異年齢の子どもたちと遊んでいるのはどんな子どもたちなのか、気になってくる。図13では、彼らの生活実態を追ってみた。すると、どちらかといえば、彼らはあまり勉強をしないで、テレビをよく見ている子どもたちであることがわかった。塾に通っている子どもが少ないのではないかと思われたが、意外にも塾通いの日数は他の子どもとあまり変わりがない。そして、半数近くの子どもが、「毎日」よく遊んでいる。昔ながらの子どもの姿をほうふつとさせる。まだこうした子どももいることはいるのだが、あくまで彼らは少数派である。

しかし、表5の数値は、彼らの中にはあま

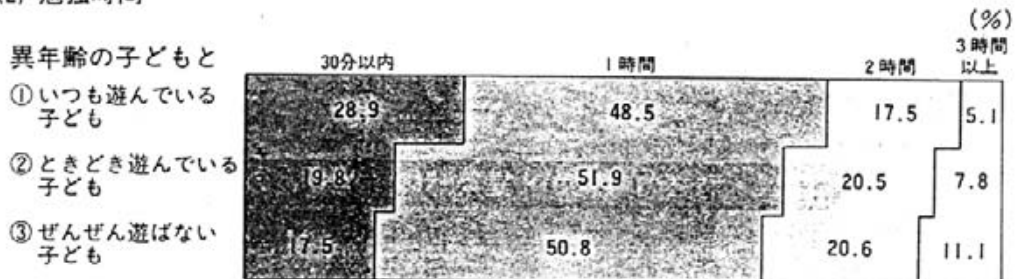
り学校が楽しくない子が多いことを示している。「いつも遊んでいる」子どもたちの40%が、学校を「あまり・ぜんぜん楽しくない」と答えている。図14の勉強の自己評価にはさほど開きがないので、彼らの学校嫌いは、勉強嫌いのためだけでもなさそうである。エネルギーをもてあましている彼らとしては、学校でおとなしく座っているよりも、地域で遊びまわるほうがはるかに楽しいものなのだろう。学校の文化や体質にはまりきらない子どもにとって、地域での遊びは、自分らしさを発揮できる行為として、重要な意味をもつてはなからうか。

図13・日常の生活×異年齢の子どもとの交遊

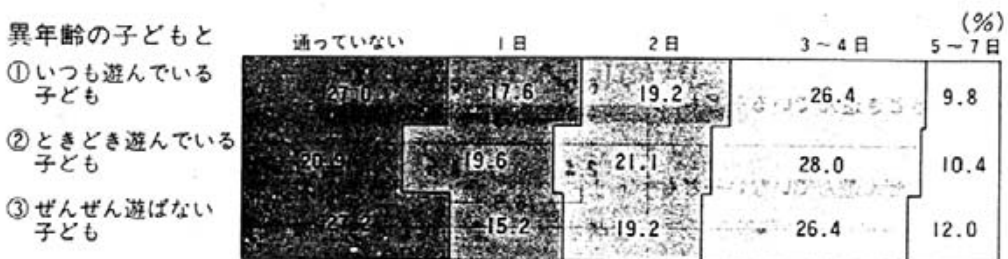
(1) テレビ視聴時間



(2) 勉強時間



(3) 塾通いの日数



(4) 遊ぶ日数

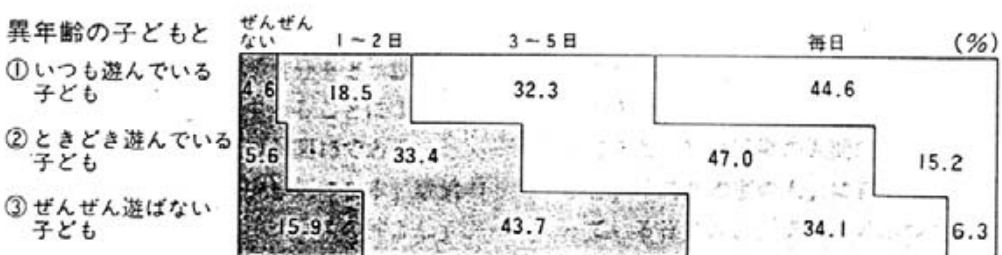


表5・学校の楽しさ×異年齢の子どもとの交遊

(%)

		学校に行くのが楽しい				
		とてもそう	わりとそう	ふつう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
異年齢の子どもと	いつも遊んでいる子ども	18.0	18.6	23.8	21.6	18.0
		└─36.6─┘			└─39.6─┘	
	ときどき遊んでいる子ども	23.2	19.9	33.7	13.6	9.6
		└─43.1─┘			└─23.2─┘	
	ぜんぜん遊んでいない子ども	22.8	17.1	34.9	16.3	8.9
		└─39.9─┘			└─25.2─┘	

図14・勉強の得意さ×異年齢の子どもとの交遊

(%)

		勉強ができる				
		とてもそう	わりとそう	ふつう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
異年齢の子どもと	いつも遊んでいる子ども	6.7	8.2	44.1	24.6	16.4
		└─14.9─┘			└─41.0─┘	
	ときどき遊んでいる子ども	6.0	10.3	49.0	23.6	11.1
		└─16.3─┘			└─34.7─┘	
	ぜんぜん遊んでいない子ども	2.4	14.5	37.9	24.2	21.0
		└─16.9─┘			└─45.2─┘	

3. 地域の人間関係



せばまる人間環境

近隣社会の崩壊、人間関係の希薄化が、危機的様相として伝えられる昨今であるが、こうした状況の中で、子どもたちにとって地域とは何なのか、どういう意味をもち得るのかを、データを通して考えていきたい。

まず、子どもがどのような人びとに関心の域に入れているのか、「自分をどう思っているか気になる人」をたずねることによって、明らかにしようとしたのが図15である。

「とても・わりと・少し気になる」数値の高いのは、「父母」、「クラスの仲よし」、「担任」であり、「近所の仲よし」や「クラスの子」となると、50%前後の子どもが気にならなくなってくる。まして「校長先生」、「近所のおばさん」、「近所の学年のちがう子」となると、ほとんど気になる対象ではな

いようである。あまり他人の目を気にするのも神経質すぎて問題であるが、全く気にならないとなれば、心理的なつながりが断たれていることを意味しよう。今の子どもは、家族や仲よしの子どもなど、ごく限られた人間的環境の中で生活しているともいえる。

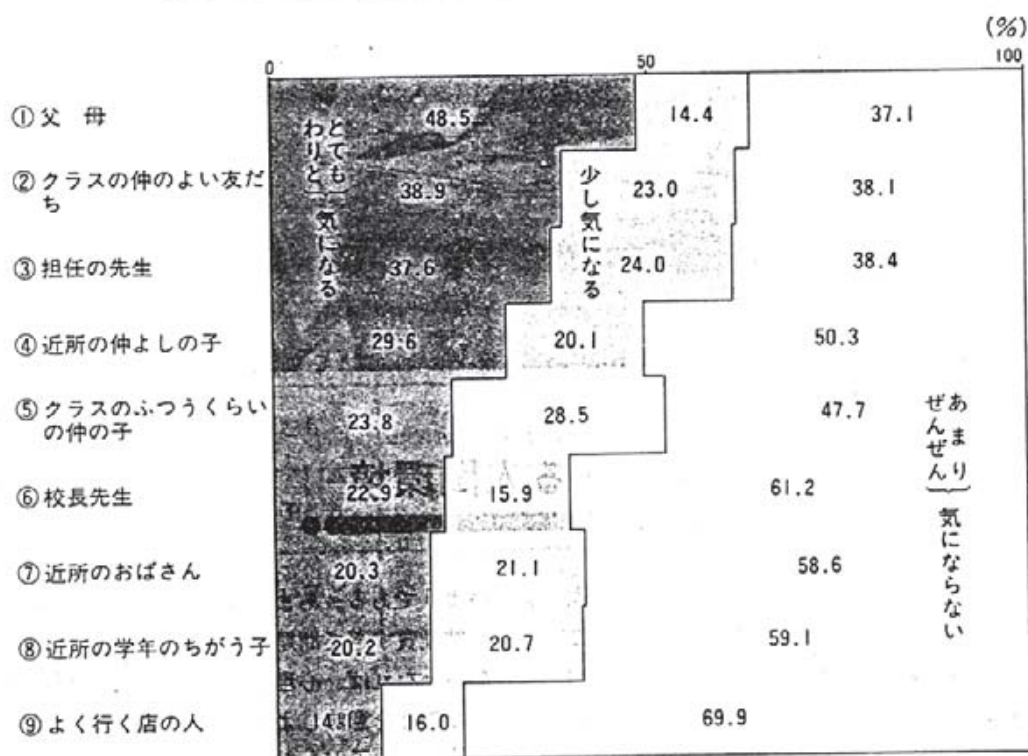
こうした心理的に「他人」である人びととのつきあいの程度を図16、17で具体的にたずねてみた。特に近隣の人間関係に注目してみると、「隣りの家の人」に自分を知ってもらっている程度は、「クラスのふつうくらいの仲の子」と同じくらいであり、隣り合わせに住んでいても、性格までわかってもらっていると答えた子どもは、40%ほどである。近所の異年齢の子どもに知られている程度はさらに低い。「お菓子屋さん」「文房具や

さん」に関しては、顔や名前、どこのうちの子どもであるか知ってもらっている子どもがほとんどであるのに、「会ってもしゃべらない」や、「あいさつ程度」の子どもが多く、あまり深いつきあいにはならないようである。しかし、全体を通して「ぜんぜん知ってもらっていない」子どもは少数であるし、あいさ

つもしないほどつながりが断たれているわけではない。あいさつやちょっとしたやりとりなど、ごく表面的なつきあいの姿が浮かびあがってくる。

地域別に見ても(図18)、隣人とのつきあいでは、「少ししゃべる」か「あいさつくらい」かのちがいはあっても、「家や友だちの

図15・自分のことをどう思っているか気になる人

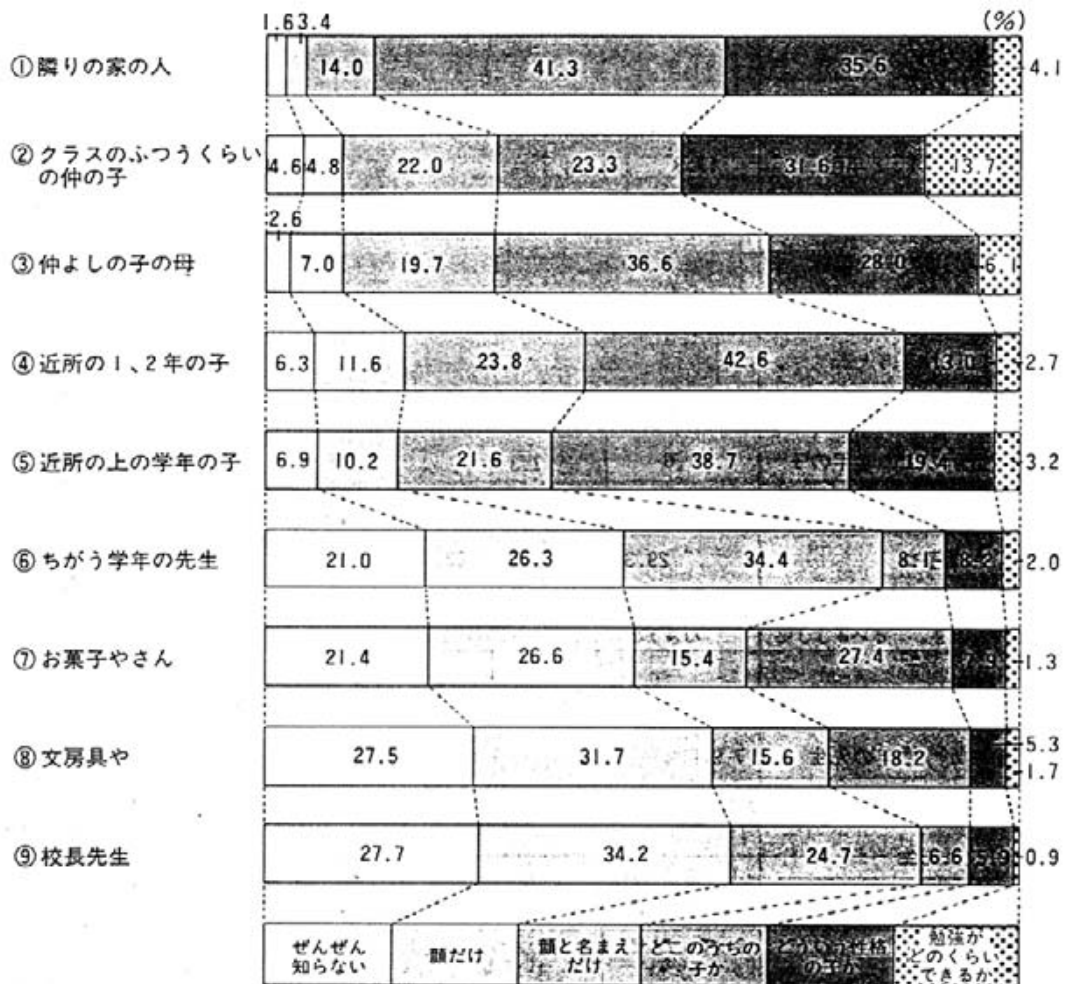


ことを話す」子どもの割合は、ほぼ固定している。「お菓子やさんとのつきあい」にも同じ傾向を指摘できよう。

子どもたちと近隣社会の人びととの結びつきは、決して強いとはいえない状況であるが、それでも子どもたちは近所のおとなの人びとにとってもよいイメージをもっていることが表

6から読みとれる。特に「やさしくて親切な人が多い」76%、「陽気で楽しい人が多い」63%、「子どもが悪いことをしたら、すぐ注意してくれる人が多い」63%など、近所のおとなたちは、子どもにとって好ましい人間像として映っていることがわかる。「わがままで自分勝手」、「がんこ」、「ずるくて信用

図16・自分をどの程度知ってもらっているか

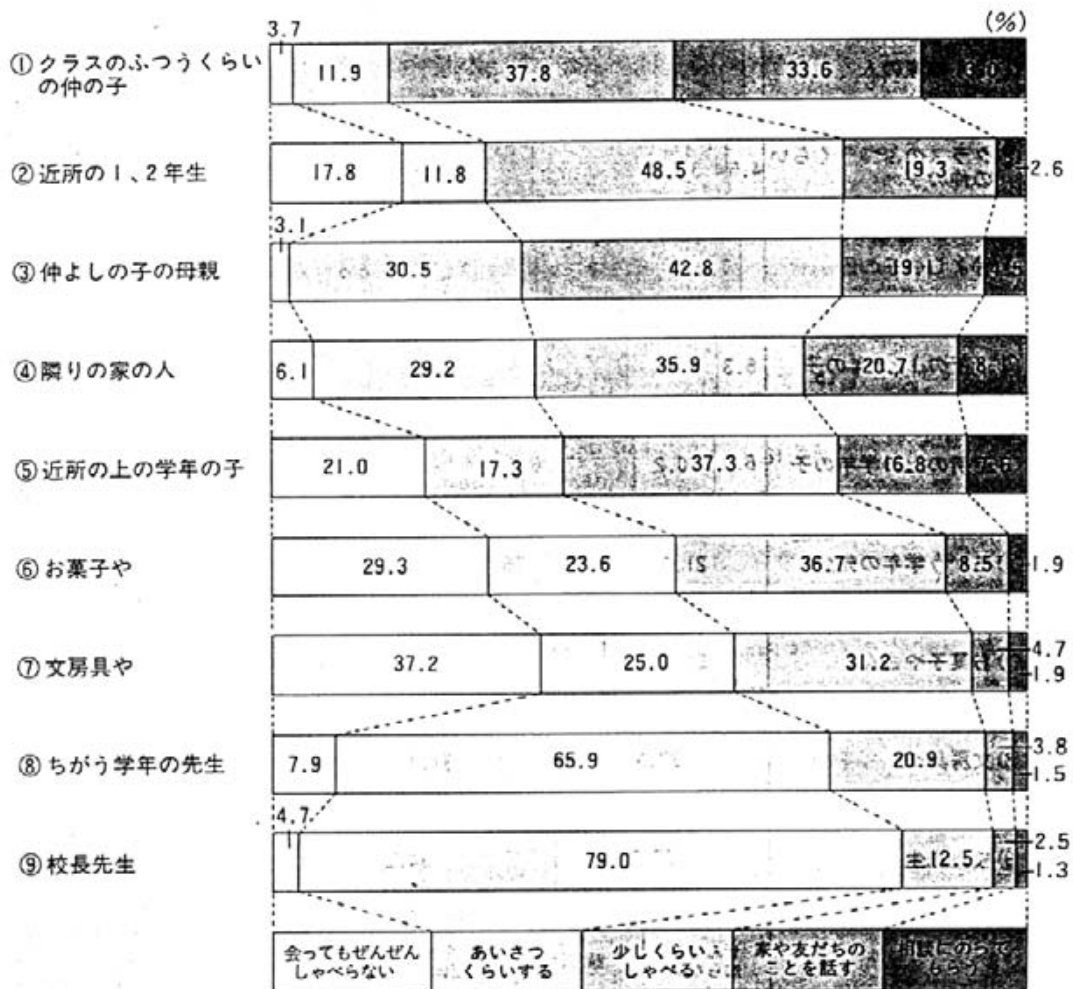


できない」に、肯定している子どもはごく少ない。しかし、「たよりになる」、「よその子どもをよく見ている」となると、少し数値が落ちるのは、現実的なつながりが薄いためであろうか。

地域の人びとがこのように肯定的に見られているということは、子どもたちとの実際の

接触は少ないとはいえ、近隣社会が子どもたちに及ぼす精神的影響には無視することのできないものがある、ということができるだろう。図19では、友だち、近所のおとなの人、担任の先生という三者の他己評価（を想像させたもの）と自己評価とを重ね合わせてみた。最も評価の分かれるのが「おもしろい子」で

図17・親密度



あり、友だちの評価が最も自己評価に近い。ついで近所のおとなの人の評価が高く、担任教師からは一番、「おもしろい子とされていない」と感じている。また、「礼儀正しい」と感じているのは近所の人であり、「わがまま」を否定してくれるのも近所の人である。近所の人には「よい子」の側面しか見せてい

ないことからこういった結果が出るのかもしれないが、「割によく思われている」との子どものとらえ方は、また、近所の人への肯定的な評価とも結びついていると考えられる。

図18・近隣とのつきあい×学校

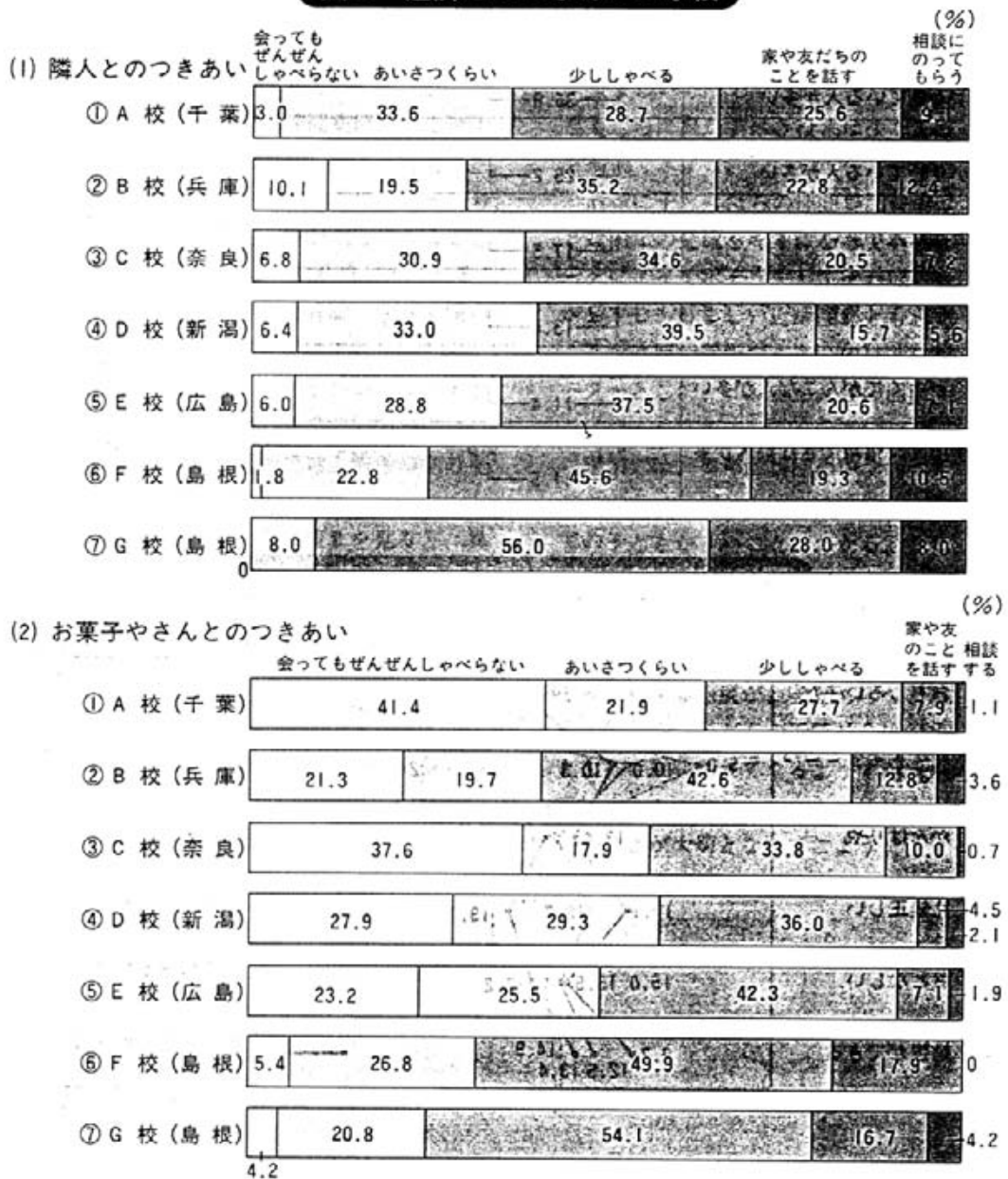


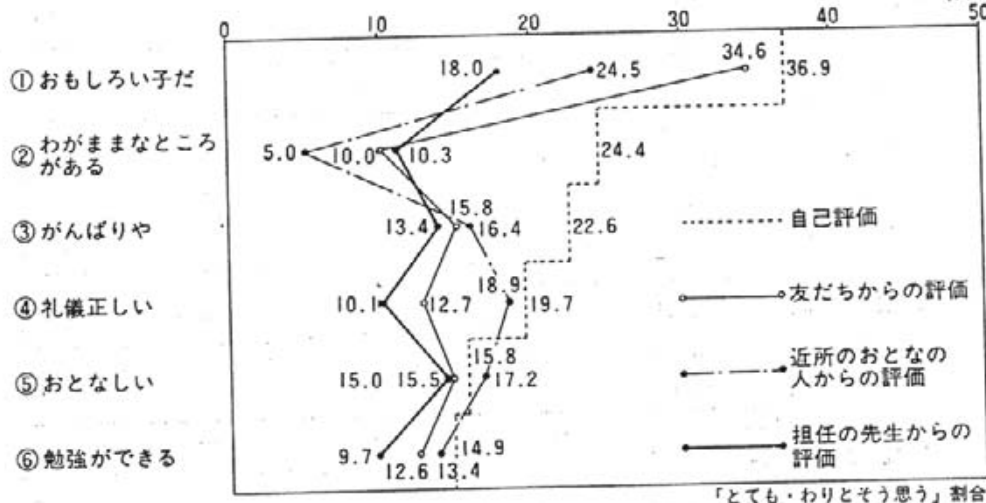
表6・近所のおとなのイメージ

(%)

	とても そう思う	わりと そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	ぜんぜんそう 思わない
①やさしくて、親切な人が多い	29.4	46.3	16.8	5.4	2.1
②陽気で楽しい人が多い	27.4	35.6	20.0	12.1	4.9
③子どもが悪いことをしたらすぐ注意してくれる人が多い	23.6	38.9	20.4	12.2	4.9
④ものわかりのいい、たよりに なる人が多い	17.9	28.9	31.6	15.0	6.6
⑤よそのうちの子どものことを よく見ている人が多い	12.6	24.3	26.2	24.9	12.0
⑥おしゃべりで人のうわさ話ば かりしている人が多い	10.0	15.2	21.4	31.7	21.7
⑦上品な人が多い	6.4	11.1	35.3	29.6	17.6
⑧わがままで自分勝手な人が多 い	5.1	8.3	16.6	29.4	40.6
⑨頭が古くてがんこな人が多い	4.7	6.7	20.3	28.8	39.5
⑩ずるくて信用できない人が多 い	4.7	6.8	16.0	26.8	45.7

図19・友だち・先生・近所の人からの評価

(%)



まとめに代えて

表7は第2章で分析したギャング集団と周囲の人びととのつきあいの関連をみようとしたものである。地域の中で遊ぶ子どもは、クラスの中でもつきあいの幅を広げているようすがうかがえるし、また近隣のおとなの人たちとも積極的に交流をもっていることがわかる。「子どもたちにとっての近隣社会の復活」には、どうやら近隣仲間集団の中で遊ぶことが、大きな意味をもっているようである。

図20では、近所のおとなの人のイメージも、三者の間には評価のちがいが見られることを表している。特に「子どもに注意してくれる」、「たよりになる」の項目で評価が大きく開いているのは、実際に地域の中で遊び、おとなたちと交流をもってみないとわからない実感だからであろう。近隣の異年齢仲間集団は、グループ内の子ども同士で対人関係の能力を培うだけでなく、地域の人びととの心のつながりも深めるようである。表8を見ると、異年齢の子どもと遊ぶ子どもたちは、自分自身「おもしろい子だ」と感じていて、友だちからも、また近所のおとなの人からも、「おもしろい子」として見られている率が高い。

学校社会においては、成績の良し悪しといった一元的な価値観が浸透しており、多くの子どもたちを不幸にしている事実が指摘されている。たとえ勉強ができなくても、他人から「おもしろい子」と認められ、個人として

の価値を評価してもらえることは、自己充足感につながっていくのではないだろうか。

今回の調査では、近隣の遊び仲間集団や、子どもと近隣社会との結びつきが、決して全く消え失せてしまったわけではないことが確認できた。のみならず、これからの近隣社会が望ましい方向で築かれていくなら、その子どもたちに果たすべき役割は少なくないことも指摘できよう。

最後に子どもたちの仲間集団育成には、おとな同士の交流もキイになっていることをデータによって示そう。おすそわけのやりとりが必ずしも好ましい近隣関係とも思えないが、ここでは親の近所づきあいのひとつのバロメーターとして、「おすそわけの回数」をとりあげた。

図21では、異年齢集団の中でいつも遊ぶ子どもの中には、おすそわけのやりとりの多い家の子どもの多いことがわかる。また、図22によると、近所づきあいの悪い家の子どもは、その他の子どもに比べて、近所のおとなのイメージが著しくダウンしている。おとなの、近隣に対する態度が、子どものつきあいの広さ・狭さや、子どもの近隣社会に対する評価となって反映されてくるようすがうかがえる。家族ぐるみでのつきあいを地域社会に広げていくことが大切となってこよう。

表7・周囲の人びととのつきあい×異年齢の子どもとの交遊

(%)

つきあいの程度 異年齢の子どもと		会っても ぜんぜん しゃべら ない	あいさつ くらい する	少し くらい しゃべる	家・友だち のことを 話したり する	困った時 相談に のって もらう
		①クラスのふつう くらいの仲の子	いつも遊んでいる子ども	5.1	10.3	32.8
	ときどき遊んでいる子ども	2.0	10.8	41.7	32.5	13.0
	ぜんぜん遊ばない子ども	2.4	13.6	49.6	24.8	9.6
②ちがう学年の 先生	いつも遊んでいる子ども	13.1	57.6	22.0	6.8	0.5
	ときどき遊んでいる子ども	5.6	67.2	21.1	4.3	1.8
	ぜんぜん遊ばない子ども	10.6	72.4	15.4	0.8	0.8
③校長先生	いつも遊んでいる子ども	5.6	76.1	15.3	1.5	1.5
	ときどき遊んでいる子ども	4.3	80.6	10.3	2.5	2.3
	ぜんぜん遊ばない子ども	5.6	84.8	6.4	3.2	0
④近所の1,2年生	いつも遊んでいる子ども	10.8	6.2	43.5	33.3	6.2
	ときどき遊んでいる子ども	16.4	12.9	53.3	15.9	1.5
	ぜんぜん遊ばない子ども	34.7	16.1	41.1	6.5	1.6
⑤近所の上の学年 の子	いつも遊んでいる子ども	13.9	12.9	36.7	25.3	11.3
	ときどき遊んでいる子ども	23.3	15.5	39.1	14.0	8.0
	ぜんぜん遊ばない子ども	37.3	28.5	25.2	4.9	4.1
⑥仲よしの子の 母親	いつも遊んでいる子ども	4.1	23.5	40.8	24.5	7.1
	ときどき遊んでいる子ども	3.3	29.3	44.1	18.8	4.5
	ぜんぜん遊ばない子ども	4.0	40.0	40.8	10.4	4.8
⑦隣りの家の人	いつも遊んでいる子ども	5.1	23.0	29.1	31.1	11.7
	ときどき遊んでいる子ども	5.3	27.8	40.3	20.1	6.5
	ぜんぜん遊ばない子ども	8.8	48.0	24.0	11.2	8.0
⑧お菓子や	いつも遊んでいる子ども	24.5	18.9	39.7	14.3	2.6
	ときどき遊んでいる子ども	26.7	25.7	39.6	6.0	2.0
	ぜんぜん遊ばない子ども	43.2	23.2	24.8	6.4	2.4
⑨文房具や	いつも遊んでいる子ども	34.3	24.6	30.8	7.2	3.1
	ときどき遊んでいる子ども	38.6	24.6	32.7	2.3	1.8
	ぜんぜん遊ばない子ども	47.2	25.6	22.4	3.2	1.6

図20・近所のおとなの人のイメージ×異年齢の子どもとの交遊

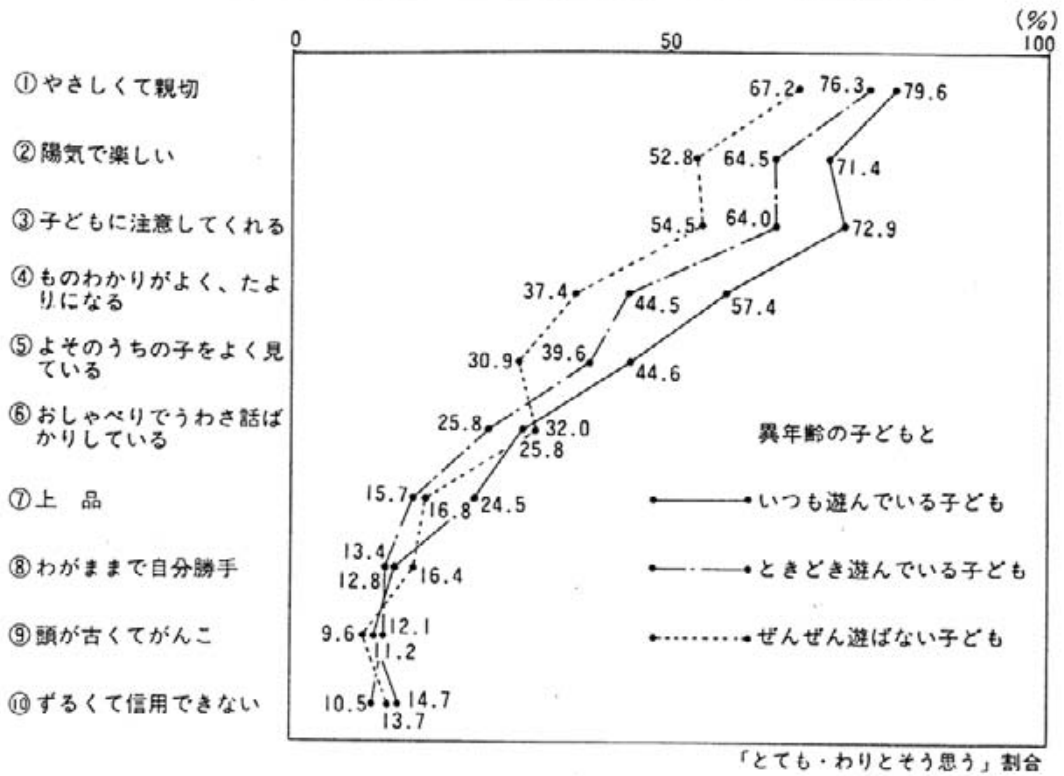


表8・自己・他己評価×異年齢の子どもとの交遊

おもしろい子かどうか	異年齢の子ども		
	ぜんぜん遊んでいない	ときどき遊んでいる	いつも遊んでいる
友だちから	20.4	35.0	42.6
担任の先生から	13.6	16.6	21.6
近所のおとなから	14.5	23.3	32.6
自己評価	34.2	37.2	42.3

「とても・わりとおもしろいと思われる」割合

図21・近所からのおすそわけ×異年齢の子どもとの交遊

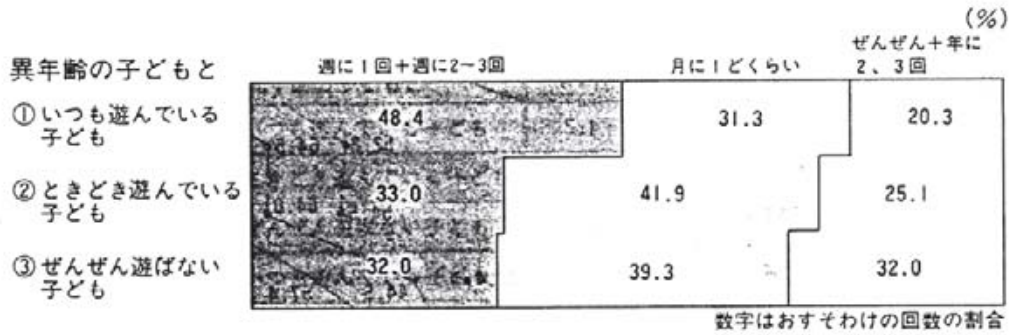


図22・近所のおとなのイメージ×近所づきあい

